

新春対談 世界見据え人材育成 秋田魁新報 2011.01.01

世界見据え人材育成

新春対談

活動

意識改革なくして秋田の将来はない。そのために大学は何をなすべきか。

吉村 平成の初めまで経済が右肩上がりなのは、ほかと同じような大学でも許されたのかもしれない。今は個々の大学にどんな特色があるのか、どんな優秀な教員がいるのかが問われている。開発型の頭脳集団をつくっていくかないといけない。新

しいものを生み出す人材を育てるのが大学に課せられた使命だ。

中嶋 秋田は学力テストの好成績が示すように、小中学校の教育が素晴らしい。高等教育も他県に比べ充実している。今必要なのは人材育成であり、教育にしっかり投資することが重要だ。例えば国際教養大には全国各地から学生が集まる。留学生が世界中から来る。すぐに効果は出ないかもしれないが、学生たちが秋田で過ごしたことは大きな財産であり、将来さまざま



国際社会の中での秋田の可能性などについて議論する(左から)小林さん、吉村さん、中嶋さん。秋田市の秋田キャッスルホテル

地域の経験が糧

発信する力磨こう

学生へ

国際化が進む中で、どんな人材が求められるか。

吉村 グローバルな視点で物事を考えることができる、そんな学生を育てたい。秋田大は外国人留学生が165人と増えてきた。目標の200人に近づいている。短期でもいいから、学生が外国へ行って学ぶことのできる機会を増やしたいと思っている。特に本県出身の学生は全般におとなしく、コミュニケーション能力に難点がある。そういうところから変えていかないといけない。

小林 優秀な生徒の多くが東京の大学に行ってしまうのだ。東京志向が強いのは親の見栄もあるのだから。当方には充実した研究設備があるのに、と残念に思う。県立大に秋田県出身者は入学時、およそ3割いる。ところが県内にどれだけ就職するかという点、2割を切るのが実情だ。大学卒業者を必要としない企業も多い。受け皿が十分でないため、せっかく



こばやし・しゅんいち 1938年、奈良県生まれ。大阪大大学院修了。東大副学長、理化学研究所理事長などを経て2006年から秋田県立大学長。専門は低温物理学。72歳。

な形となって返ってくる。そうした人材のネットワークは大きい。インターナショナルスクールが課題になっているが、国際教養大ならそれもできる。国際化が進むほど、外国人の流入が進む。好むと好まざるに関わらず、その子供たちへの教育が重要になる。それを東京ではなく、秋田でやりたい。

吉村 秋田は高齢化の先進県だ。高齢化に合わせた産業こそ必要であるとの考えからものづくりに取り組み、秋田モデルを発信していきたいと思っ

中嶋 国際教養大も各自自治体と協定を結んでおり、留学生が各地に出向いて英語を教えるなど、異文化交流という形で地域貢献に取り組んでいることを強調しておきたい。3大学はそれぞれ特色がある。うまく連携すれば、もっと秋田の力になれる。

小林 目的意識を持つこと、強い知的好奇心を持つこと、そしてコミュニケーション能力を高めることを求めている。社会に出たときに自分で歩ける能力、問題を解決する能力を身に付けさせたい。そのため県立大では開学時から、学生がグループで行う自主研究に力を入れている。なるべく教員が口を出さないで、学生が独自に行う。失敗しても自分で考える。それが社会で役立つ。この取り組みをずっと続けていきたい。

吉村 英語教育を充実させるほか、学生の好奇心や潜在的な能力を高めた。そのため、わらび座と提携し、劇団